

2年前、がんと闘いながら故郷・愛知県犬山市の中学校でライブを行った。力を振り絞ってピアノを演奏し、歌い、そして生徒に語りかけた。

「他の人の人生ではなく、自分の人生を生きて」

当時の校長で中学時代の恩師、井戸則夫さん(61)の目には、その姿が焼き付いている。「親や教師の示す道でなく、自分の夢にまい進する素晴らしいさを全身で教えてくれた」

小学2年生でピアノを始め、中学生では作詞作曲も手がけた。名古屋音大1年だった1982年5月、高校の同級生が書いた詞に曲をつけた「花ぬすびと」の弾き語りや、ヤマハポピュラーソングコンテスト優秀曲賞を受賞。グラプリはその後、大ヒットするあみんの「待つわ」だった。コンテストの編曲スタツプだった森田雅彦さん(60)は「ジャンル分けできない独自の音楽を作る人だった。どちらが勝ってもおかしくなかつ

がんと闘い 感動の歌声



がんと闘いながら、ピアノの弾き語りによるライブ活動を続けていた明日香さん（2011年6月、愛知県犬山市で）＝井戸則夫さん撮影

た」と振り返る。

もの悲しい旋律が人々の心をとらえた「花ぬすびと」は、この年の世界歌謡祭ではグラプリに輝き、30万枚を売り上げるデビュー曲になった。その後もシングル11枚、アルバム10枚を発表し、アイドルの高井麻巳子さんらへの楽曲提供でも活躍した。

母親の菅桂子さん(77)は「大切なのは環境でなく努力だ」という信念を持っていた」と語る。音大進学後も、自宅では小さなアップライトピアノを愛用し続けた。

2005年、股関節の病気の治療で実家に戻る。複数回の手術後、乳がんも患った。この頃、離婚も経験した。

友人の歌手相曾晴日さん(49)は当時、自分のライブにゲストとして招いたことがある。「人生の困難を乗り越え

た人の迫力ある歌声に、胸が熱くなった」。観客アンケートでは「明日香の歌に感動した」という声相次いだ。

一時は体調も戻り、活動を再開させたが、10年に骨へ、その後も脳へがんと転移が発覚。それでも病室にキーボードを持ち込み、スタジオ録音までした曲を「つまんないから作り直しちゃった」と笑って話し、周囲を驚かせた。

母校の音大で予定していたライブが迫り、10月中旬「練習したい」と自宅に帰る。そこで力の入らない手を鍵盤に置き、訪れた看護師へのお礼に今年作った歌を歌った。

「トドクヒトにはトドク今日だけの言葉が、この想いが」（早川矢寿子さん作詞「ヒビク」）

母と姉、中学3年の長女と小学5年の長男に手を握られ、眠るように息を引き取ったのは、その数日後だった。（中部支社編集センター 中村亜貴）